

『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問—穴からのぞく大学講義』

大阪大学ショセキカプロジェクト編

食料・環境領域 主任研究官 高橋祐一郎



食べ物としてのドーナツは、小麦粉に水、砂糖、バターなどを加えた生地を揚げたもので、様々な形をしています。しかし、「ドーナツ型をしているもの」といわれれば、ほとんどの人が、真ん中に穴が空いているあの形を思い浮かべることでしょう。一口食べれば穴は消え、食べ尽くせば、指に油や砂糖がつくだけで、形は何も残ってはいません。

しかし、インターネットで本書のタイトルにもなっている言葉を検索すると、「穴に空気とは違う気体を詰めてから食べる」や「では私は穴を残しますので、あなたが穴の存在を証明してください」といった、科学的・情緒的なものも含め、複数の視点からの「解決法」が多数提示されています。本書第0章の著者によれば、2009年秋頃からインターネットで議論が始まり、2013年までに三度のブームが起こり、今もなお「問い」と「解決法」の提示に関する情報は受け継がれ、いわゆるミームとしての地位を築いています。

本書は、この情報に興味を惹かれた大阪大学の学生の有志が、学生自身の発案を実際の出版に結びつける演習の受講をきっかけに、この「問い」に、様々な学問の立場からの「解決法」を求めようとする企画を立て、大阪大学に所属する教員に専門家として執筆を依頼し、提出された原稿を編集し、教員・出版社の協力のもとで作り上げた書籍です。

本書は、「はじめに」でコンセプトが示され、次いで第0章で「ドーナツの穴談義のインターネット生態学的考察」として、この情報がミームとなるまでの過程が説明されています。その後、「第1部 穴だけ残して食べるには」として、「ドーナツを削る—工学としての切削の限界」、「ドーナツとは家である—美学の視点から『ドーナツの穴』を覗く試み」、「とにかくドーナツを食べる方法」、「ドーナツの穴の周りを巡る永遠の旅人—精神医学的人間」、「ミクロとマクロから本質に迫る—歴史学のアプローチ」の計5章で、「自らの専門の立場から「解決法」を提示した」専門家の原稿が収録されています。続いて「第2部 ドーナツの穴に学ぶこと」では、「パラドックスに潜む人類の秘密—なぜ人類はこのようなことを考えてしまうの

か?」、「ドーナツ型オリゴ糖の穴を用いて分子を捕まえる」、「法律家は黒を白と言いくるめる?」、「ドーナツ化現象と経済学」、「ドーナツという『近代』」、「法の穴と法規制のパラドクス—自由を損なう行動や選択の自己決定=自由をどれだけ法で規制するべきなのか?」、「アメリカの『トンデモ訴訟』とその背景」の計7章で、「解決法は提示しないが、自らの専門の立場とドーナツとの関連についてなら書いてもいい」と企画担当の学生に答えたであろう、専門家の原稿が収録されています。

ほとんどの章の文体は、まるで専門書のように、ところどころに挿入されている「コラム」以外は、気軽にドーナツを食べながら読むのは難しいでしょう。いずれの分野の専門家も、この「問い」に答えることは難解だったようです。しかし、各章の冒頭で、指や手でドーナツの形を作ってにこやかに写っている専門家の写真を見ると、原稿を引き受けたものの、実際に書いていくうちに戸惑い、挑戦し、なんとか書き上げてほっとした様相が想像されます。また、学生の側も、単に原稿を集めただけでなく、重要だと感じた部分を太字で強調し、補足の解説文を自ら作成し、レイアウトや広報も積極的に行っていることがわかり、書籍化していく過程での苦勞が忍ばれます。

この「問い」、人によっては「馬鹿げている」と一蹴され、持ちかけた相手は軽蔑されるかもしれませんが、しかし、本書の書籍化を牽引した指導教員は、「はじめに」の中で、「『あたりまえ』を疑え」は学問に携わる人々にとって基本的な姿勢であり、一見、常識外れなこの「問い」に、専門家が本気で取り組むことは、学問の力の見せどころ、と主張しています。まるでネタ本のようなタイトルとは裏腹に、学生の社会体験記録にとどまらず、社会が抱えている問題や、今後の科学技術のあり方についても考えさせられる良書です。

『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問—穴からのぞく大学講義』

編者／大阪大学ショセキカプロジェクト
出版年／2014年2月
発行所／大阪大学出版会